

# 「四日市から医療変える」在宅療養

## 「最期は住み慣れた家で」 石賀丈士医師

方と過ごし方を考える  
までのサポートを  
末サポ  
終サポ  
今月の  
インタビュー

「最期を迎える場所は住み慣れた家で」。四日市山城町の「いしが在宅ケアクリニック」の石賀丈士医師(38)は4年前、在宅専門のクリニックを市内で初めて開設し、在宅療養を支える医師として奮闘している。勤務した病院で、苦

しんで亡くなっていく患者に接し、「病院でしている治療が本当に全部必要なのか……」。病院は治療や手術に専念するところで、療養は自宅で」という思いを抱いた。貴重な最期の時間を家族と過ごし、亡くなることを孫たちに見せることで、「子どもたちは小さいころから命の尊さを知る」と石賀医師。

同クリニックは365日24時間体制で対応。在宅療養でも入院とほぼ同様の治療が可能で、痛みをコントロールする緩和ケアを中心に、本人や家族と相談しながら必要な処置を決めている。

「患者や家族が笑顔になること」を大切に、1人の医師が1日に6人から10人の患者の家を訪問。訪問看護師、薬剤師、ヘルパーと連携し、患者や家族を支える。石賀医師は過労で倒れた経験もあるが、徐々に賛同するスタッフも増え、この春からは医師7人体制で診療に当たるそうだ。高齢化が進む今、病院のベッド数には限りがあり、在宅での療養が重要な役割を担っているとされている。全国に



▲思いを語る石賀医師

先駆け、四日市市では医療と福祉が連携して在宅療養に取り組んできた結果、家で亡くなる人が18・5%(2012年)と、全国平均(13%)を上回っている。

在宅療養が増えることで、病院で長時間待たされたり、急患が病院をたらい回しにされたりすることもなくなり、治療や手術がうまく機能していく。石賀医師は「四日市から医療体制を変え、地方でも在宅でみとりができることを証明し、全国モデルになりたい」と熱く語った。

問い合わせは同クリニック ☎059・3336・2404へ。